



みんなで作る
SAITAMA
STYLE
大玉
スタイル
方式
2021-2022

theme

TAMAPHO
つながりをチカラに

埼玉県障害者芸術文化活動
支援センター

アートセンター集

art center syu 2021 report

「令和3年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業」報告書

社会福祉法人
みぬま福祉会
Minuma Fukushikai

障害者芸術文化活動普及支援事業

「障害者芸術文化活動普及支援事業」とは——厚生労働省の助成事業です。2014～2016年度に埼玉県など12の地域で実施した「障害者の芸術活動支援モデル事業」の成果をもとに、2017年度から全国各地へ広がりました。

目的

地域における障害者の自立と社会参加の促進を図るため、全国に障害者の芸術文化活動に関わる支援センター等の設置を行い、支援の枠組みを整備することにより、障害者の芸術文化活動(美術、演劇、音楽等)を推進する。

地域の社会福祉法人やNPO法人などがセンターを開設し、それぞれ年度事業を計画して活動しています。

◎都道府県レベル 支援センター

地域内の相談支援、人材育成、発表機会の創出、ネットワークづくり、情報発信など

○ブロックレベル 広域センター

エリア内の支援センターへの支援、地方自治体の基本計画策定支援、ブロック研修など

○全国レベル 連携事務局

全国の情報収集・発信、ネットワーク体制の構築など
<https://arts.mhlw.go.jp>

南関東・甲信 広域センター

南関東・甲信
障害者アートサポートセンター
(社会福祉法人 みぬま福祉会)
<https://skk-support.com>

北海道・北東北
北関東
南関東・甲信
中国・四国
近畿
東海・北陸
九州



表現活動を通じて
人と人を豊かに
つないでいきます

埼玉県 支援センター(基幹型)

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集
(社会福祉法人 みぬま福祉会)
<https://artcenter-syu.com>

埼玉県 支援センター(特色型)

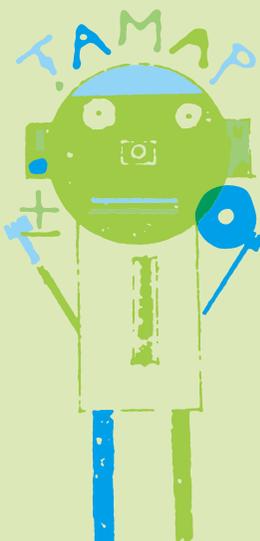
ART(s)さいほく
(社会福祉法人 昴)
<https://www.subaru-swc.com/~groovin/>

「令和3年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業」報告書
art center syu 2021 report
スタイル
みんなでつくる 埼玉方式

もくじ

| | |
|-------------------|----|
| 埼玉県障害者アートネットワーク | 02 |
| 活動概要 みんなでつくる展覧会 | 03 |
| 活動報告 | |
| 定例会・研修会・見学会 | 05 |
| 表現活動状況調査 | 07 |
| 作品選考会 | 08 |
| 埼玉県障害者アート企画展 | 09 |
| 織り&グッズ展 | 15 |
| タマップダンス公演プロジェクト | 17 |
| アートセンター集 相談窓口のご案内 | 19 |
| タマップコラボマンガ | 20 |
| 埼玉県障害者芸術文化情報 | 21 |
| タマップだより | 23 |
| TAMAP±O参加団体 | 25 |
| 工房集とアトリエ見学ツアーのご案内 | 25 |

2021年度は
「TAMAP±O つながりをつかち」をテーマに
展覧会を中心に6年間紡いできた
ネットワークの絆による活動の
広がり・深まりをご報告します。



活動報告員の
吹き出しは
福祉施設等の
メンバーの感想です

埼玉県障害者アートネットワーク
TAMAP±O マスコットキャラクター
「タママップくん」

✕ アートセンター集は
事務局として活動を
取りまとめています

障害のある人たちの“表現”を 社会に広げるために——



「無題」稲益綾恵

埼玉県障害者アートネットワーク タマップ プライマゼロ TAMAP±O

表現することは生きることそのもの。
その支援は福祉の延長にあり、
その人らしく生きる日々の中で
周囲の理解と関わりにより育まれています。

埼玉県障害者アートネットワークTAMAP±O(通称タマップ)では、県内の福祉施設等の職員をはじめ、県の担当者、美術や法律の専門家、作家や家族など、様々な人たちが連携して活動しています。障害のある人の作品は、決して特別なものではありません。それぞれの内から生き生きとあふれ出た表現が、多くの人の心をゆきぶりアートとして評価されています。その表現の多くは、それぞれが自己と向き合い、個性を生かすことができる日常から生み出されています。障害のある人たちの表現を社会に広げるためには、その一人ひとりの日常と表現に目を向けることがとても大切です。タマップでは、障害のある人たちの日常に携わる福祉施設等の職員たちが、表現を社会に広げる活動を通して、日々の「支援のあり方」を模索し、その学びを現場に活かしています。そして、発掘した新たな表現による感動を多くの人たちと共有し、みんなで社会の未来をひらくアートや福祉の可能性を探求しています。



県内の福祉施設や
事業所のメンバーが中心となり、
様々な人たちとともに
支援の輪を広げています。



日々の表現と向き合う

tamap±o

埼玉方式：核となる取り組み

TAMAP±O

みんなで作る展覧会

ポイント

表現の発掘・発信

障害者の自立と社会参加の機会創出

支援のまなざしを育む

表現を育む人づくり・環境づくり

様々な人と成長し合う

協働共助のネットワークづくり

新たな価値創造

アートで未来をつくる

多様性を包括する社会づくり

未来を見据え、官民協働でスタート!

2009
障害者の作品の芸術性・創造性を正当に評価する環境を整えることで社会に新しい芸術観や価値観を創出できるのでは——との提言をもとに、行政、福祉、美術、教育等の機関が連携して県主催の「埼玉県障害者アートフェスティバル」を開催。その一環で「埼玉県障害者アート企画展」が始まりました。また、県は「障害のある方の表現活動状況調査」を開始。その調査票から出展作品を選ぶ方法も生まれました。

つながりを礎に支援の拠点&ネットワークを発足!

2016
展覧会の実践で培ったつながりを基盤に、国の助成を受けて「埼玉県障害者芸術文化活動支援センターアートセンター集」と「埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP±O」を発足しました。

福祉施設職員たちが学びながら継続!

2012
企画展では支援者の育成に重点を置き、学生や福祉施設等の職員が学びながら展覧会を運営するワークショップを導入。さらに実践的・持続的な活動を目指し、福祉施設等の職員が主体となって企画・選考・設営・運営まで一貫して行う方法へと移行しました。

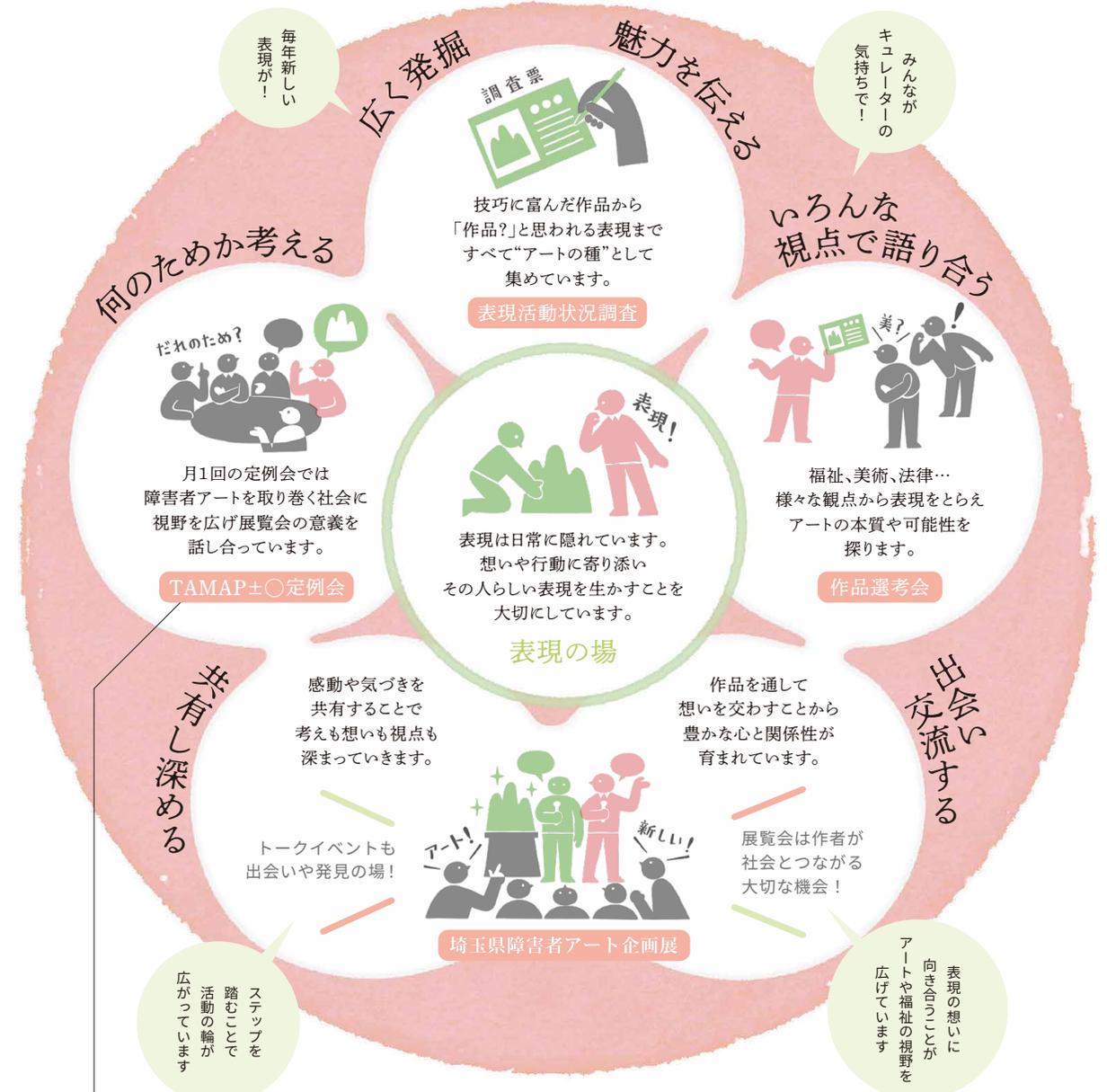
他県から注目される活動へと発展!

2020
企画展は、障害のある人たちに表現への自信や意欲をもたらし、周囲のまなざしや意識にも変化を与え、活動がさらに深まり、広がり、普及支援事業のモデルケースになるなど他県へも波及しています。

一つひとつの表現と向き合い、みんなで探り、深め、広める——

その展覧会実践を繰り返し日々の支援につなげています。

プロセス



関連する活動

研修会

- アートレクチャー
- グッズ研修
- 著作権研修
- 施設見学会

織り&グッズ展

- ライブパフォーマンス
- ワークショップ

新たな表現の発掘

- ダンスワークショップ
- ダンス公演プロジェクト

定例会・研修会・見学会

表現と向き合うことは、支援のまなざしを育むこと。

その魅力を探り語り合うことで、

作者や表現に向けるまなざしが大きく変わります。

TAMAP±O定例会

2021/4-2022/3

タマップでは月に1回、福祉施設等の職員や県の担当者などが集い、話し合いながら活動しています。「埼玉県障害者アート企画展」に向けては、単に展示会の手法を学ぶのではなく、長年、表現活動に携わっているアートディレクターの中津川浩章さんによるレクチャーをはじめ、作品選考、コンセプトの検討、設営、運営、振り返りといった一連の活動を通して、多様な表現と向き合うこと。そして、その学びを各現場でも共有することで、「支援のまなざし」を育むことに重点を置いています。

コロナ禍前は、実際に集まり、表現活動の悩みなども語り合いながら緩やかなつながりをもって運営してきましたが、昨年度からはオンラインでの集まりが中心となっています。しかし、多くの方が気軽に参加できるようになり、今年度は、31団体から70名を超えるメンバーが参加。障害者アート関連の様々な情報も交換し合い、施設同士や県との相互協力の関係性がさらに深まりました。



主に第3木曜日の16時から約2時間開催
内容は議事録にまとめて共有

タマップでは刺激になることが多く、職員のなかでも「なんでアートなのか」「なぜ作品をだすのか」…と「なぜなぜ問答」をするようになり、とても良い環境になってきています。



見学会

2021/5/20

オンライン施設見学

毎年、支援者や仲間同士の関わりを通して「支援のあり方」をともに考える工房集アトリエ見学ツアーを実施してきました。今年度は中止となり、かわりに2つのタマップ参加施設がオンラインで表現活動の場を公開。利用者の方々が、それぞれのリズムで仕事や創作に取り組む映像を通して、各施設が表現活動で大切にしていることを紹介していききました。

1. やどかりの里 すてあーず 「自信を育むものづくり」

繊細な模様が刻まれた革小物や、布製品をはじめ、最近は端材を組み合わせたステンドグラスも制作。1階ではリサイクルショップも運営し、着物のリメイク品も試作中です。たくさんの素材が並ぶ2階の工房では、利用者の方々がマシンや作業台に向かい細かな手作業に集中していました。運営経費や売上との兼ね合いで、技術に見合った工賃を捻出できない課題を抱えながらも、一人ひとりの意欲や時間を大切に、上質でオリジナリティのある「自信がもてる製品」を生み出しています。



研修会

アートレクチャー

2021/7/15

企画展に向けてまず、表現や支援の意味を考えるために、キュレーターを務める中津川浩章さんが、障害者アートの動向や現代アートとの関係性、福祉的視点の意義や埼玉の取り組みの特徴などについて解説しています。



○作品を選考する視点やアートの意味を広く考えることができました。
○制作の背景として、その人を理解することや関わることの重要性を改めて感じました。

- 毎年、「自分たちがやりたかったことはこれだ」と再確認する機会になっています。
- 「作家本人を大切に制作しよう」と改めて施設内で共有。
- グッズの変化以上に職員の視点が変化しています。

グッズ研修

2021/6-12 8回

表現や作者と社会や人をつなぐ商品化の中間支援をしているcon*tioの杉千種さんと山口市佳さんが、「何のための商品化なのか」を考えてもらうために、各施設独自の商品開発や品質向上に向けたアドバイスをを行っています。



著作権研修

2022/3/7

弁護士の方本憲武さん(モッキンバード法律事務所)が作品や商品を守るために必要な権利や契約について解説。「こんな作品ってあり?」など現場に即した疑問にも回答。今年度は作者向けと支援者向けの二部構成にしました。



○学校のは難しかった、今日の(クイズ形式)はわかりやすかった。
○「創作の個性を大事にしよう」という権利擁護の気持ちも共有できたと思います。
○模写表現への理解浸透にも役立つ内容でした。

2. 皆の郷 川越いもの子作業所 「豊かさもたらす表現活動」

「好きなこととことん」をモットーに、木工部では切ったり磨いたり、表現活動Studio IMOではのんびり創作。年に2回は地元で展示会を開催。コロナ禍は施設内展示を増やし、ウェブでアーティストトークを公開するなど、作家それぞれの魅力を積極的に発信しています。その取り組みから、思わぬ利用者同士の交流が生まれたり、普段は一つの場所に留まらない作家が展示された自分の作品の前で佇んだり——「内面や関係性が豊かになる」様々な変化が生まれているそうです。



○表現活動をする上で環境づくりが重要だと改めて感じました。
○職員や利用者さんと一緒に見たい活動の参考になる内容でした。
○情報の発信の仕方などを学びたいと思いました。
○他の地域の取り組みや利用者さんを知る良い機会になりました。
○他施設の実践の話聞くことができても勉強になりました。

「これってアート？」も発掘!

「表現活動状況調査」とは——障害のある人の芸術・文化活動を普及・支援するために、埼玉県が2009年から独自に実施している実態調査です。絵画や造形、ダンス、詩などのほか、作品かどうかかわからない表現もすべてアートの原石として発掘しています。埼玉県障害者アート企画展では、この調査票をもとに出展作家を選考することで、毎年、アートの概念を覆す個性あふれる多彩な作品を社会に発信しています。

調査票のポイント

今年度、企画展の出展作家に選ばれたNPO法人ゆめたまごの作家、稲益綾恵さんの調査票を例にご紹介します。(作品はP.2に掲載)

※作品の写真の上下(天地)について、以下の該当する方に ○ を付けてください。
別紙 本紙上側が作品の上(天)・本紙右側が作品の上(天)



写真は作品全体の質感がわかるように、明るい所で正面から歪まないように撮りましょう。光の反射や背景色にも気をつけて! 小さな絵はスキャンングもおすすめ!

選考会では、一人ひとりの表現を知る“手がかり”が重要。備考に、作品が生まれた背景やどんな作品かを記入しましょう!

作家名 稲益 綾恵
※作品の題名がない場合は必ず「無題」と記載してください。
題名 無題
※必ず下記のいずれかに○を入れてください
◎新作 ○旧作 …… ○本調査 未提出
□本調査 既出

作品のサイズ 縦 28×28cm×横 36.5×41.5cm×高さ _____cm (※立体的の場合)
作品の素材 画用紙、コピー用紙、色鉛筆、2Lシヨウ、ボールペン
備考 (作品が生まれた背景、作品の情報(著作権等)
「身体にならぬと「お絵かきしよう」と買って紙の束と画材を持って来ました。新しい紙が来たら、毎日同じ紙を重ねて書くので、紙の束がなくなりました。昨年応募した作品に塗り重ね、このような状態になりました。」
昨年の状態

提出期日 ※年度により変わります。

第1次期限:6月頃、第2次期限:12月頃
第1次で提出された作品のうち同意が得られたものを
埼玉県障害者アート企画展の出展候補としています。

提出方法

調査票と別紙に内容を記入。メールに添付して送信(郵送・ファックスでも可)
①調査票(アンケート用紙兼同意書)
②別紙(作品情報記入用紙) ※写真で記録できない作品はDVD、CD等でも可

作家ご本人はもちろん、ご本人の了解の上、支援者・団体でも提出できます。詳細は県のホームページをご覧ください。調査票もダウンロードできます。提出前には「情報の活用方法と個人情報の取扱いについて」をご確認ください。

URL <https://www.pref.saitama.lg.jp/a0604/hyougenchosa.html>



落書きみたいな絵も
不思議なコレクションも
毎日つぶっている言葉も…
表現だね!



今年度は演奏や写真、
小説なんかも集まったよ!
絵画やダンス以外の表現の
発表の機会も模索中です!



埼玉県「障害のある方の表現活動状況調査」WEBページ

お問い合わせは、アートセンター集(TEL:048-290-7355)または
埼玉県福祉部 障害者福祉推進課(社会参加推進・芸術文化担当 TEL:048-830-3312)まで

作品選考会

2021/7/16-8/22,9/7

日常の表現の中にアートの原石が隠れています。

多様な視点を交えて新たな表現を発掘することで、
アートの可能性が広がっています。

アートと福祉の視点が交錯

「埼玉県障害者アート企画展」の選考会では毎年、美術の専門家だけでなく、福祉施設の職員をはじめ県の担当者や弁護士など数十名が一堂に会し、何百もの調査票から選んだ作品について自由に意見を出し合いながら、多様な視点を交えて選考を行って来ました。施設職員が語る作品が生まれた背景や作者の表現へのこだわり、美術の専門家それぞれの着眼点など、福祉とアートの異なる視点の交錯から、新たな気づきや視野の広がりがもたらされ、みんなで作者の想いに想像を巡らせながら、「人間が表現することの意味とは何か」と議論を深める豊かな時間が生まれています。今年度の「本選考会」は急遽オンライン開催となり、活発な意見交換はできませんでしたが、事前に昨年度のコロナ感染対策から生まれた「ミニ選考会」を実施。「みんなでつくる」選考が各施設等に浸透していたことで、例年以上に密度の濃い作品を選出することができました。

- 鑑賞する視点や展示を意識して選考したことが、初参加の職員の大きな学びになりました。
- 調査票から他施設の支援の姿勢が垣間見られ、表現活動の刺激になりました。
- 職員みんなで選考をするようになってから、関心が高まり支援の関わりも変わってきています。
- 選考手法を施設内の展覧会でも活かしています。
- 調査票による応募の機会を知り、利用者さんや支援員の表現活動への意欲が高まりました。



スクリブルでは描き込みが向上した作品が増え、調査票の作品撮影も含めて全体的にクオリティが上がり、施設職員の表現活動への想いも上がっているように感じました。重要なのは展示されるかどうかではありません。多様性のある作品が集まり、みんなで選考して共有することに意義がある。そして、それを持ち帰り考える。そのプロセスに意味があると改めて思いました。



オンラインにより過去最多の約60名が参加して656名の調査票から109名の作家を選出。各自での選考では、リストに選んだ理由も記入してもらい作家へフィードバックしました。

① レクチャーで展覧会の目的や意義を共有



② データ化した調査票をもとに各自で選考(選考会参加者は個人情報取扱いについて誓約)



③ 各施設等で「ミニ選考会」を実施



④ 「本選考会」は得票順位リストを共有しながらオンラインで推したい作品を説明し合うかたちで開催



本選考会参加者:中津川浩章(美術家、アートディレクター)、小澤基弘(画家、埼玉大学教育学部教授)、酒井道久(彫刻家、埼玉県立大学名誉教授)、前山裕司(新潟市美術館館長)、若本憲武(弁護士/モッキンバード法律事務所)、山口里佳(コーディネーター/con'tio)、杉千種(同左)、埼玉県福祉部障害者福祉推進課3名、福祉施設等31団体



©埼玉県立近代美術館



展覧会タイトル等もタマップ内で協議して、たいむ共生会さんの案を採用。
「長い制約のある生活の中で黙々と制作を続ける作家さんたちの想いを想像し、
Look at me! 私の作品を見てという想いを重ねた造語です」

埼玉県障害者アート企画展

2021/12/8-12/12

人間にとってアートとは、表現とは、障害とは…

多様な表現で本質を問いながら

社会に新たな価値を創造しています。

埼玉県立近代美術館で開かれた企画展には、すでに国内外で高く評価されている常連作家の新作から、福祉の現場や地域から新たに発掘された表現まで、今年も実に幅広い作品が並びました。なぐり描きのような線描画、穴が開くほど塗り重ねられた絵画、得体の知れない集積物……その多様な表現から「表現とは何か」を来場者とともに考え、障害者アートの可能性を社会に問うことを続けています。

開催に向けては、キュレーターの中津川浩章さんが本選考会後の再調査を経て出展作品を選出。設営はタマップ参加施設のメンバーが、実作品から受けた感動をいかに伝えるか試行錯誤しながら展示計画のもと協働で行っています。今年度は、施設の室内の壁に表現された作品には、写真パネルに加えて動画も準備。一部の作品はキャプションで創作の背景を伝え、より表現の魅力が伝わる展示を心がけました。また、設営後は展示作品について説明し合い、作家の情報も共有して運営にのぞみました。



裏面では制作風景を紹介



感染縮小で作家との交流も復活!

LOOK ART ME!!

第12回埼玉県障害者アート企画展

12TH ART EXHIBITION IN SAITAMA

福祉現場から生まれる「アート」の数々。どうしてこれほどユニークなものが、心を打つものが生まれてくるのか。長く関わってきた今でもやはり同じ感想をもっています。「アート」も「福祉」も特別な人だけのものではありません。人間が人間らしく生きるために、誰にとっても必要不可欠な営みなのです。

この二つが重なり合った場所から、見たこともないような桁外れな「表現」が生まれる不思議さ。そして現代の社会で最も生産性から遠く離れているように見える場所に、むしろそこだからこそ、奇跡のような「表現」が存在しています。

109人の作家による約600点の作品は、埼玉県内にある30以上の福祉施設のスタッフ、行政職員たちが、アート、デザイン、教育、法律などの専門家とともに対話を重ねながらセレクトしました。

人間が表現することの原点が、ここにはあるのです。

本展キュレーター 中津川 浩章



様々な車種を展開図から制作
「アクティブな車でドライブ」fumi



スタンドグラスと毛糸による
「ラグビーボールのできそこない」(右赤) 栗田英二



極小! 粘土製「6Pチーズ」浅見翔吾



2021/12/8

ギャラリートーク

1

中津川浩章
×
前山裕司

長年、企画展に携わっているお二人による恒例のトークイベント。それぞれの視点で作品を紹介しながら、障害のある作家の表現の魅力や社会的価値、この活動の意義などを語っています。昨年同様ウェブでの公開でしたが、撮影・編集をプロに依頼。構成を決め、録画した映像に作品映像を挟み、字幕を2色に分けることでより多くの人への鑑賞支援につながる動画になりました。

本展キュレーター・美術家 中津川 浩章さん

今回で3回目となる前山さんと、お気に入りの作品をめぐる対話の時間。対話は自分一人で話すと違って新鮮で多くの発見がある。障害があるアーティストの作品は明確に言語化されたコンセプトやステートメントがほとんどない。既成の美術の知識では説明ができないばかり。そのため、わかっていることを話すよりも知らないこと、感じているのに言語化できないことを対話によって表現することで作品を理解する糸口が少し見えてくる。その時間こそが創造性に満ちた時間でもある。

新潟市美術館館長・元埼玉県立近代美術館主席芸主幹 前山 裕司さん

障害のある作家はずっと同じような作品をつくっていると思われがちですが、作品も作家も変化していく。そのことが、12年間展覧会を続けているとよくわかります。今回も面白い作品がたくさんあったので、話す作品を選ぶのは難しかったです。動画を見た人からは、わかりやすい、聞きやすいという声をもらいました。おそらく事前に作品を選び、大まかな撮影のアングルを決めていたためでしょう。でも、これまでのダラダラした空気も捨てがたいと思っています。

2021/12/8

ギャラリートーク

2

小澤基弘 教授
×
埼玉大 学生

今年度は、学生3名がそれぞれ選んだ3作品について小澤教授と語る初の試みもウェブで公開。素直な感動からあふれ出す言葉や作家と心通わすような語り、教授の問いかけから学生自身の創作の想いが引き出される様子などが、「新鮮だった」「新たな視点が得られた」と好評でした。



聖物良太さん



宇田川海さん(左「勝ち誇るティラノサウルス」ヨッシー)



「ウルトラマン」柴田和



笹川途斗さんと小澤教授

埼玉大学教育学部教授(絵画及び美術教育) 小澤 基弘さん

障害者アートについて、私は大学の講義等でこれまで積極的に取り上げ紹介してきました。工房集の仲間たちの作品、これまでの様々なアール・ブリュット展等の作品は、圧倒的な表現の強さと独自性を放つもので、学生たちも常に感動しきりです。ただ、どうしても授業では画像が中心で、実作の放つオーラを感じさせることはできません。この度アート企画展で実作に学生が触れることで、彼らは肌感覚でこれらの作品のすばらしさを感じてきたと思います。普段は寡黙な学生たちですが、実作に触れて、彼ら自身の言葉で率直かつ饒舌に感想を述べていました。実作のオーラが、彼らの言語感覚を覚醒させた感があり、普段と異なるその姿に私は大きな喜びと彼らのもつポテンシャルの高さを改めて感じました。今後も障害者アートの実作に触れるこうした貴重な機会を、大学の授業で最大限に生かしたいと考えています。

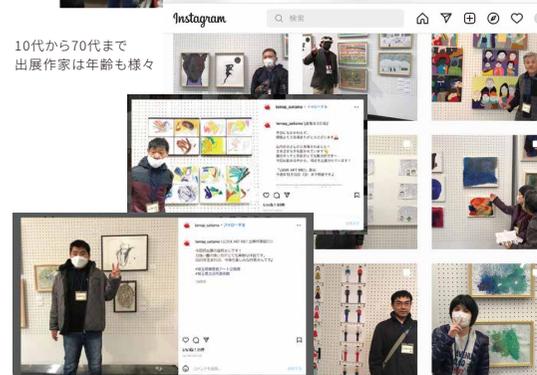
埼玉大学教育学部美術専修2年生 宇田川 海さん

僕は障害者アートを直接見るのは初めてでした。最初見たときには、「本当に自由な表現だなあ」という思いを強く抱きました。個々に見るうちに、作品一つひとつにかける集中力の高さに驚きました。視点や色彩の豊かさに、「こういうこともありなんだ!」と思い、自分の制作のモチベーションになったと思います。特に僕は恐竜の絵に心惹かれましたが、その構図の強さに圧倒され、作者の恐竜に対するワクワク感が強く感じられて印象に残っています。

YouTube / 工房集



映像はYouTube
「工房集チャンネル」で
配信中!



10代から70代まで
出展作家は年齢も様々

作家イベント

企画展では、オープニングセレモニーなど作家主体のイベントも企画。それぞれの日常で表現している作者たちが、積極的に地域のこの活動に参加して、様々な人と交流できる機会をつくっています。コロナ禍前は、来場者の前で創作の想いを作家自ら語る「アーティストトーク」も行い、作家同士やファンとの交流も生まれていました。今年度の会期中は幸い新型コロナの感染縮小期にあり、数名の作家が在廊し、来場者に作品を説明したり作家同士で作品を鑑賞したりする姿が見られました。

鑑賞ツアー

企画展では、施設に団体での鑑賞をうながし、日ごろ展覧会へ行く機会がもてない障害のある人たちの鑑賞支援にも力を入れています。展示された施設の仲間などの作品を鑑賞することが、表現活動への意欲や出展作家の自信につながるだけでなく、同行した職員が活動を理解するきっかけにもなっています。

情報発信

会期中、タマップInstagramでは、来場した出展作家の様子を配信しました。初日には、テレビ埼玉などの取材に出展作家が応じ、多くの反響がありました。会場では、作家自作の作品集なども販売。毎年制作している「作品集」は、工房集オンラインストアで販売を続けています。



第12回埼玉県障害者アート企画展
「LOOK ART ME!!!」作品集
109名の出展作家の作品画像を収録



企画展の振り返り



来場者数 1,450名

作家や周りの人について

- 作家が作品展示や創作活動を通じて社会と関わることで、成長しているなど感じています。
- 出展者以外の利用者のモチベーションも上がり、今年度、調査票を提出して選出されました。
- 初出展の作家のご両親が「処分を考えていたが、作品として出展されて見方が変わった。作品を通して人と交流ができて良かった」と喜んでいました。
- 会場で作家の方々が、生き生きと作品を説明して下さったのが嬉しく、幸せな気持ちになりました。

設営について

- 初対面の人と相談しながら飾ることで、みんなでつくり上げる展覧会を実感できました。
- 中津川先生から「感性で飾ってみましょう」とアドバイスをもらい、楽しみながら作業ができました。
- ベテランの方との作業は安心感や信頼感があり、初参加の方とのやり取りでは初心に返ったような気持ちになりました。展示では、普段の作品や作家への向き合い方や培われた感性が問われると感じています。

活動を通して

- 展覧会を共有することで、アート活動について職員間で話す機会が以前よりも増えました。
- 継続すること、制作者の変化を見守ることの大切さを、改めて感じました。 …など

来場者の声 ※469名の来場者アンケートより

- 生きることを見つめ直したり、ささやかな物事を大切にすること、人は表現するものだということ…忙しい日々で埋もれてしまう、人の根源にたくさん触れられた気がします。作家の皆さん、周りで関わる皆様、形にしていって皆様によってつくられている共創社会は、こんなにもあたたかく、絶対に実現できるのだと希望をいただきました。(30代福祉関係者)
- 皆さん本当に生きていることと作ることが直結している様が素晴らしいです。(50代美術関係者)
- 障害児学級に勤め、描くことや作ることが大好きな生徒に会いました。でも当時はその価値は認められず、今このように自由に創り出し多くの方々に見てもらえて素晴らしいです。(50代学校関係者)
- ぼくもいっしょうけんめい作って出してみたいです。(40代福祉施設利用者)



「ジョーカー」 斉藤淳太



織り&グッズ展

2021/12/18-24

来場者数 570名

何のため誰のため…

みんなで問い続けた先に

たくさんの輝きが生まれています。

工房集のギャラリー&ショップを会場に、今年度は13団体の施設商品を紹介しました。作品をデザインした雑貨や織物、木工、革、ガラスなどの手作り小物のほか、小さな絵画なども展示販売して、埼玉から生まれた多彩な表現を暮らしへと広めています。グッズ研修の一環でもある本展には、研修のアドバイスにより改良された商品も並び、表現活動をしている福祉施設等の学びの場にもなっています。また、毎回、作家が来場者との対話から絵や詩、書などを創作する「ライブパフォーマンス」や、ステンドグラス作家などが講師を務める「ワークショップ」も開催。作家や表現の魅力を様々なかたちで広め、笑顔あふれる出会いにつなげています。



作家主体のライブパフォーマンス&ワークショップ

ワークショップ
【ステンドグラスのオーナメント作り】

2021/12/19

ステンドグラス作家数名が講師となり、その技を披露しながら制作の楽しさを伝えました。



久しぶりに講師を担当したステンドグラス作家の栗田英二さん。急逝されこれが最期の大事な仕事となりました。



栗田さんが見本で作った作品も購入して下さったお客さんの当日のインスタのコメントです。

織り&グッズ展開催中、限定5名様に幸い申し込みができてステンドグラスのオーナメント作り！初めてのステンドグラス。憧れはあったが機会がなかった。ありがとうございます。作家の栗田英二さんとテーブルを囲んで！夢の時間は流れ、集のギャラリーで購入した皆さまの作品を眺め、オーナメント眺め…幸せをかみしめる。なんて素敵な時間だったんだら〜ありがとう。

——小さなガラスから生まれた幸せな時間。跨りしお二人の姿からも伝わってきます。ありがとうございました。

ライブパフォーマンス
【僕がひとつ、あなたのことをぼやいてみせましょう】

2021/12/18

ぼやきパフォーマー金子隆夫さんが、お客さんとの対話から、一人ひとりへの似顔絵付きメッセージをポストカードにしたため、プレゼントしました。



新人ながら大人気だった「のりもん」。グッズ研修のアドバイスを受け、吊るす紐の素材を変更。手作り感に磨きをかけて販売した

新登場のコラボグッズ



○みんな「自分たちの織りがこんな素敵な製品になるなんて」と感嘆！
○コラボによって自分たちにはない新しい方向性が見えてきました。

コロナ禍で作業に乗り切れない仲間が多い中、野本さんが始めた編み物の人形が売れたと伝えると、とても喜び、生活に張りが出た様子でした。



注目!

商品をギフトボックスにして展示。贈り物に詰め合わせるのが楽しい製品ばかりでした。

毎年、商品全体がパワーアップしている。

○搬入を手伝い普段活動に関わらない職員も刺激になったよう。
○奥に入りたくなる長居したくなる魅力的な陳列でした。



各施設から仕器やポップなども持ち寄り設置

今回大人気で完売した額絵。作品をデザインしたバッグなども制作しているが、より原画の魅力を伝えようと手書き紙に印刷し木製パネル化

ステンドグラス作家それぞれの個性が光るランブシェード。よりインテリアとして楽しんでもらえるようスタンド型に改良し、カタログ風で使用例の写真も揃えて出展



第3川越
いもの子作業所

○他施設の製品を実際に購入してヒントをもらい今後の活動の幅が広がると感じた。
○来年に向けさらに良い商品を開発していきたい。



会期中のグッズ研修ではライブ中継で改良や陳列のポイントを解説

共同出展では施設ごとの持ち味をどう活かすか



売れたことが大きな一歩。その経験を施設で共有し盛り上げていきたい。



一つひとつの商品に合ったパッケージで魅力度アップ!

自身の商品展示を見て、作家さんやご家族も大変喜ばれていた。モチベーションが低かった時期に多くの人に褒められた経験を通して、元気が出てきた様子。



いかに作家や表現の魅力を伝えるかがポイント!



我慢を重ねたこの一年

いっそ踊ってしまえとつぶやいて
今年こそ舞台に向かおう

踊ることは生きること
だとすれば、踊ることを止めなくていい
止めることはできない

この一年に起きたこと
変わってしまったこと

変わらないことと…
いるはずだった彼女と

逝ってしまった彼女と…
彼女の魂に届くよう
跳べっ!と今年は大きく叫ぶ
ベストブレイス主宰 竹中 幸子

タマップダンス公演プロジェクト

2021/7-2022/5

誰もが輝きを秘めている。それが表現となり

人の心を動かし、生きる力になっています。

美術以外の表現を模索する中で、2017年度より継続しているダンスワークショップ。障害や年齢の枠を超えて活動している県内のダンスグループ、ベストブレイスの主宰竹中幸子さんを講師に招き、そのアプローチから身体表現における「支援のあり方」を学び人材育成にもつなげています。また、公演の際は参加者以外の障害のある人たちがともに楽しめるよう、鑑賞支援にも重点を置いています。

今年度もコロナ感染対策のため、昨年度と同じ参加者で公演に向けて7回のワークショップを実施。織りやステンドグラスなどの表現(造形作品)も取り入れ生み出された様々な動きに、メンバーの提案による手作りの衣装や小道具も加えて、昨年度発表できなかったダンスプログラムに磨きをかけていきました。



障害の有無に関係なく、それぞれが新しい表現を模索できる環境の中で、共鳴し合い成長しています。



残念ながら今年2月に彩の国さいたま芸術劇場で予定していた公演「跳べ! いっそ踊ってしまえ!」は、再び延期となりました。

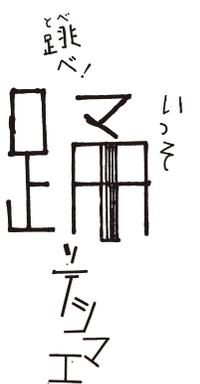


©埼玉県障害者交流センター

昨秋、初期からの参加メンバーである高谷こずえさんが空へ旅立ちました。生前よく口にしていた「私の作品を見て、元気になってほしい」という想いは、ダンスに関しても一緒でした。音楽が始まるとスイッチが入ったように表情が切り替わり、頭から指先まで全身で「もっと私を見て」というあふれる想いを表現していました。そのエネルギーは、ともに踊ったメンバーたちの胸に強く刻まれています。「5年間、一緒に踊ってきた仲間たちと舞台に立ちたい」という高谷さんの願いを背負って、舞台公演では高谷さんの生前のダンス映像を披露する予定です。



お客さんに見せたくて『キラキラのせんす』を作りました。ダンスの小道具って今まで作ったことがなかったけれど、ほめてもらったのが嬉しかったです。コロナで公演が延期になっちゃってとても残念です。大切なものがなくなると、踊りとかダンスがなくなると、さびしいですね。いつ、できるかな。
——高谷こずえ
(2020年度記録集より)



YouTube / 工房集

YouTubeの工房集チャンネルでは、昨年度制作したワークショップ記録Movieを公開中!
「跳べ! いっそ踊ってしまえ!」タマップダンスプロジェクト2020



JUMP UP
ダンサー インザホープ

アートセンター集 相談窓口のご案内



相談事業でもタマップの連携力が活かされています。

解決にとどまらず、広く課題を共有し、

日常の支援につなぐ——それが、埼玉方式！

埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集では、福祉、アート、教育、行政、司法などの専門家や専門機関と連携して、障害のある人やその家族・支援者の「創る」「深める」「広げる」「守る」をサポートしています。相談窓口では、「作品を発表したい」「アート活動を始めたい」といった表現活動に関する相談のほか、障害のある人の作品を「活用したい」「展示したい」「学びたい」といった地域の方々や企業、学生などからの相談も受け付けています。どうぞお気軽にご連絡ください。

電話：048-290-7355(平日10:00-17:00)

メールアドレス：artcenter@kobo-syu.com

※個人情報の保護を厳守し流用はいたしません。ご相談に応じるために関係者・機関と情報を共有する場合があります。ご了承の上、ご心配な点は遠慮なくお申し付けください。

2021年度の事例

自分の作品を発表したい

主に表現活動状況調査をはじめ、県や各施設の催しなどの情報を提供

調査票にあがった作品は選考会で共有企画展の出展につながったケースも

施設利用者の作品の 価格設定について知りたい

協力委員のアートディレクターに相談

作品の評価や価値についてレクチャーを実施
考え方を施設全体で共有

他人が撮った写真を見て描いた絵を商品化してよいか

模写や創作の程度により著作権侵害になる可能性があるため
まず承諾を得る必要がある内容かを精査するようアドバイス

著作権研修の情報も提供

県営競輪場の事業で障害のある作家の作品を活用したい

タマップ内で共有し、作家を募り選出
競輪を題材に描いた作品から1点が選ばれプリペイドカードに

PRではSNSでも拡散され表現活動の広報にもつながった

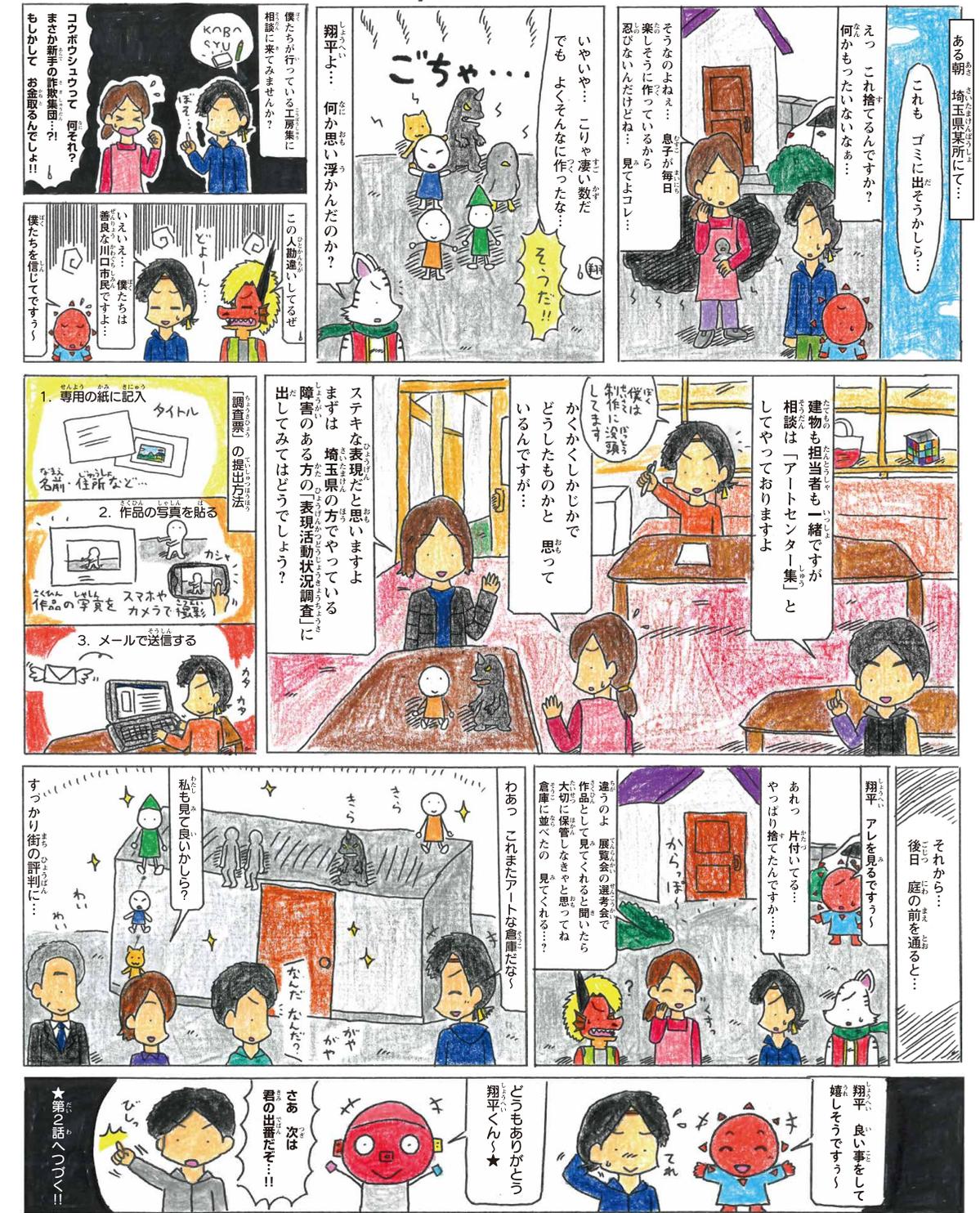


完成した「大宮競輪×障害者アートのプリペイドカード」

工房集アーティスト関 翔平×タマップ「埼玉発！それってアート？なギャグストーリー」コラボマンガ Vol.1

「ゴミを救ってアートが生まれた」

漫画：関 翔平
原案：takei tomoko
企画：埼玉県障害者アートネットワーク
TAMAP士O
制作：2022年2月



©2022artcenter-syu

関翔平による埼玉県を覆すギャグストーリーマンガ「レインボーフレンズ」Vol.13まで発行中！工房集オンラインストアをチェック！

埼玉県 障害者 芸術文化 情報

共に生きる社会を目指して

多彩な表現の魅力を広めています。

埼玉県では、障害のある人が創り出す作品の魅力を多くの方に知っていただきたく、美術展やダンス公演などを実施しています。文化や芸術は、新たな価値を社会に生み出すと共に、多様性を尊重し、人と人の相互理解を進める力があります。この文化・芸術の力により、多様であることを認め合う豊かな共生社会、心のバリアフリー、障害のある人の社会参加を推進します。

2009年から続く「埼玉県障害者アートフェスティバル」の実行委員会を中心に様々な参加イベントや普及事業を行っています。 ※下線は「障害者芸術文化活動普及支援事業」に関する取り組み

2021年度 主な事業 ◇埼玉県障害者アートフェスティバル実行委員会事業 ◇同会共催・協力 ○県補助事業

芸術性・創造性あふれる障害者アートの魅力発信

- 【美術】 ◇埼玉県障害者アート企画展 ◇障害者アート魅力発信事業 ◇障害者アートオンライン美術館
- 【舞台芸術】 ◇近藤良平と障害者ダンスチーム「ハンドルズ」公演 ◇バリアフリーコンサート
- 【共通】 ◇各種イベントにて障害者アートを展示（「VIVA LA ROCK」「埼玉 WABI SABI 大祭典」など）

障害者の芸術文化活動の裾野拡大

- 【美術】 ◇障害者絵画展（希望者全員の作品を展示する公募展）
- 【芸術文化体験】 ワークショップ（◇打楽器 ◇スティールパン ◇美術 ◇ダンス）
- 【市町村事業の実施促進】 ◇市町村担当者向け体験型セミナー ◇市町村ワークショップの開催支援
- 【芸術文化活動普及支援事業など】 ○障害者芸術文化活動支援センター ◇表現活動状況調査

2021topics

「障害者アートオンライン美術館」開館！



写真と見間違えるような精密な作品、モチーフを反復・集積させた作品、独特の視点でとらえた作品、これまでの常識を覆すようなインパクトある作品——など、障害のある方の創り出す作品には、個性あふれる魅力的なものが多数あります。その魅力を、より多くの方に知っていただくため、2021年4月に開館しました。

サイトは「作品」「動画」「寄稿文」で構成。武蔵野美術大学教授 三澤一実さんや新潟市美術館館長 前山裕司さん、工房集管理者 宮本恵美も文章を寄せています。

埼玉県福祉部 障害者福祉推進課主事 井上 美穂さん

障害者の芸術文化活動に関する業務についてそろそろ2年が経ちます。これまでは、障害者アートの分野に目を向けたことはなく、障害のある方とお話する機会も少ない生活を送っていました。そんな私ですが、障害者アートに携わるようになって、多くのことに気づき、感じ、学ぶことができました。人間のあるがままに創作する姿、人のもつ探究心の強さや表現力の面白さ、それらの奥深さに驚かされる毎日です。福祉のエキスパートの方々やその他の専門家の方々、そして行政がタッグを組んでこの埼玉方式が出来上がり、今なお発展し続けていること、その仕事に携われることを嬉しく思っています。みんなで作る「障害者アート企画展」やウェブ上で作品を鑑賞できる「障害者アートオンライン美術館」など埼玉ならではの企画を毎年度実施しながら、今後もその魅力をたくさんの人に届けていきたいと思っています。



埼玉県マスコット「さいたまっち」「コバトン」

お問い合わせは、埼玉県福祉部 障害者福祉推進課 社会参加推進・芸術文化担当まで

電話：048-830-3312

ファックス：048-830-4789

この美術館は、「障害者アート魅力発信事業」として2017年度から産民学官の連携により県内のホテル、オリンピック・パラリンピック競技会場、公共施設などにリアル展示してきた、障害のある人の魅力あふれる作品をオンライン上に掲載したものです。障害のある作家・施設から作品をご提供いただき、美術系大学の学生には作品選定や作品解説づくりにご協力いただいております。リアル展示と同様、作品解説と共に創作風景を連想しながら作品をご覧ください。さらに、障害者アートの魅力を深掘りした寄稿文や、感性・想像力あふれる作品の創作風景や作家の流儀を紹介する動画も掲載しています。この機会に、心に響く障害者アートをお楽しみください。

埼玉県障害者アート企画展の常連作家も多数出展！

動画はアートセンター集が県の依頼を受けて制作しました。



数十名の作品と共に学生のコメントも掲載。



動画は字幕解説付きです。



展示場所がわかるマップもあります。

「埼玉県障害者アートオンライン美術館」WEBサイト
<https://www.pref.saitama.lg.jp/shogaishaart/index.html>



タマップだより

ネットワーク発足から6年。以前のように、みんなで集まり語り合ったり、各地に出向いて活動することは難しい状況ですが、毎月、オンラインで多くの福祉の現場をつなぎ、顔を合わせて、障害のある人の表現の普及につとめています。この支援の絆、タマップの魅力と展望を東西南北の各支部長に語っていただきました。

互いにリスペクト

NPO法人 CILひこうせん 野本 翔平さん

私はタマップの最大の魅力はリスペクトだと思います。作家や作品に対してはもちろん、各々の障害や日々の暮らしも、それを支える制度や社会も、それに関わる人たちも、まずはみんなお互いに尊重し合う。その上でみんなで意見を出し合い、みんなでつくっていく。そういう姿勢がこのネットワークの根底にあります。だからこそ、この大変厳しい状況の中でも、しなやかに活動を継続できたのだと思います。そんなタマップ、まじリスペクトです！

Northern



北部支部長

元気を与え合う

社会福祉法人 昴 & NPO法人 かうんと5 石平 裕一さん

参加者や参加事業所のみなさんのそれぞれの考え方がとても尊重されていることが、タマップの大きな魅力だと思います。取り組みの紹介や課題や悩みなどを知ることでお互いにアドバイスを交換したりと、「元気」をもらえます。それらが各事業所に持ち帰られ、障害のある人たちのアート活動の一助になっているように思います。

Western



西部支部長

Eastern



東部支部長

原動力を導く

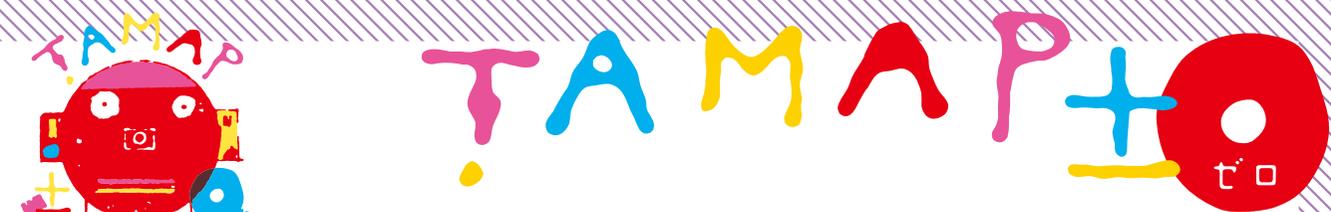
社会福祉法人 みぬま福祉会 工房集 赤羽 幸治さん

タマップの魅力は、たくさんの方とのつながりを通して、一つひとつ丁寧に話し合い、みんなでつくりあげたものを社会に発信し、さらに多くの方たちと作品を通して触れ合いワクワク、ドキドキできることです。また、作家さんに限らず、その家族や周りにいる人たちが今までとは違った世界観を広げ、大きな原動力をつくり、新しい価値を生み出しています。これからも、このタマップの力をもっと多くの人に広げていきましょう。

Southern



南部支部長



協調を支えるに

医療法人社団 双里会 多機能型事業所 わつづき 豊田 亜紀さん

長期化するコロナ禍、施設間の交流も思うようには深められない期間を経験し、各施設が制限の多い活動を強いられている。そんな中でも、グッズ制作やイベントなどで施設同士のコラボレーションを実現させている地域もあり、タマップのネットワークによって築かれている協調の体制に心強さを感じています。今年度は、支部長として何か特別な役割も担うことなく終えることとなりましたが、コロナ禍で模索したオンラインやSNSの可能性など、埼玉県障害者アートネットワークの次なる展開につながるものを得る期間だったとも感じています。

2021topics

障害者アート関連の展覧会やイベントなど、

タマップの活動以外にも連携力を発揮しています！

「埼玉 WABI SABI 大祭典2021」でグッズ販売！

新型コロナウイルス感染拡大により数々のイベントが中止となる中、感染者数が減少した11月、大宮公園を中心に開かれた県屈指の大イベントに参加。タマップとしてブースを設け、6団体が協力して2日間グッズを販売しました。「埼玉 WABI SABI 大祭典2021」は、埼玉県の盆栽や生け花、きもの、お茶、書道、伝統芸能などの和文化的魅力を「見て、感じて、楽しめる」総合イベントです。埼玉県知事も来店し、グッズを通して、普段は障害者アートに触れる機会の少ない多くの方々に、その魅力をお届けすることができました。



施設で生まれた作品をデザインしたグッズがズラリ！ 手づくりの看板やポップでタマップならではの魅力を発信するなど、織り&グッズ展での展示経験を活かした見やすい売り場づくりも好評でした。

出品協力団体：川越いもの作業所、おれんじ、光の園、ぼとふ館、ゆめたまご、みぬま福祉会

「日本博を契機とした障害者の文化芸術フェスティバル in 関東・甲信ブロック」で活躍！

日本博のテーマ「日本人と自然」を造形作品や舞台芸術公演など、国内外で評価を受けた全国の障害者の芸術表現を通して発信する文化庁主催事業の関東・甲信ブロックが、10月から12月、埼玉県と山梨県で開催されました。秩父市あしがくぼ笑楽校で開かれた作品展「アール・ブリュット-日本人と自然-」には、タマップに長年参加している2団体の作家が出展。そのうち森川里緒奈さんの作品「日々の出来事」は、ポスターやチラシの表紙にも採用されました。担当スタッフは、展覧会の設営にも参加。「タマップの企画展での経験を活かすことができました」と話していました。



埼玉県障害者アートネットワーク

TAMAP±〇参加団体

2016年に11団体から始まり2022年3月現在、31の団体が参加。
地域で展覧会やイベントを開催するなど、それぞれが表現の支援と普及に取り組んでいます。

北部

| | | |
|-----|--------|----------|
| 行田市 | NPO法人 | CILひこうせん |
| 熊谷市 | NPO法人 | ゆりかご |
| 熊谷市 | NPO法人 | ゆめたまご |
| 秩父市 | 社会福祉法人 | 清心会 |
| 本庄市 | ライフエール | 株式会社 |

西部

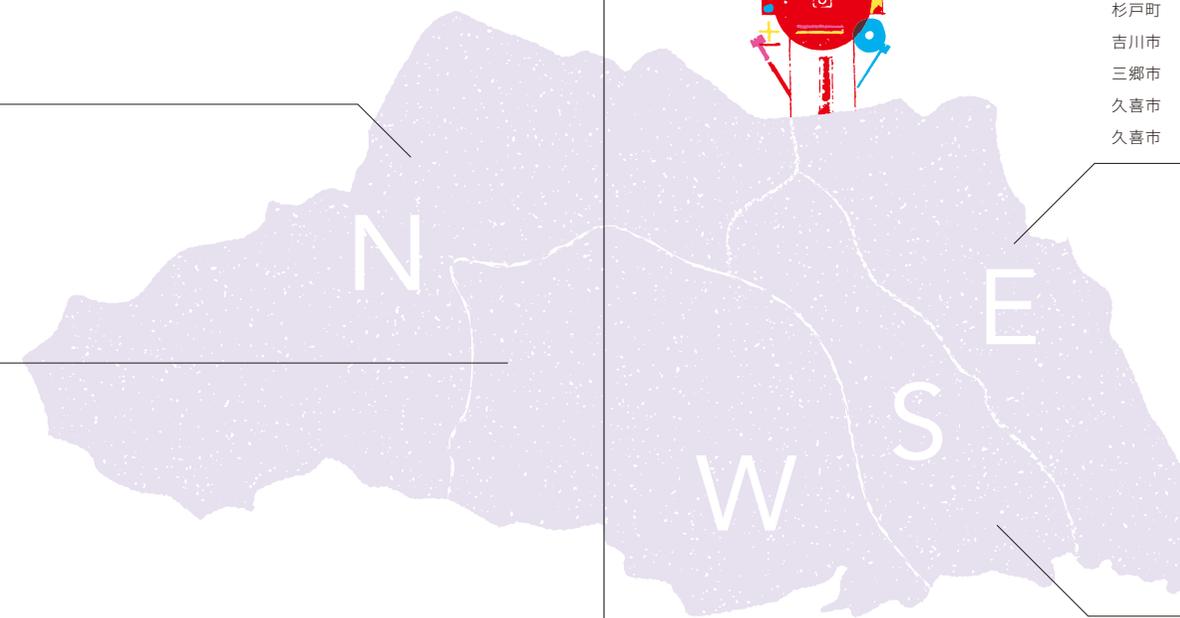
| | | |
|------|--------|-------------------|
| 東松山市 | 社会福祉法人 | 昴 |
| 川越市 | 社会福祉法人 | 皆の郷 |
| 新座市 | 社会福祉法人 | 新座市障害者を守る会 |
| 所沢市 | 社会福祉法人 | 皆成会 |
| 毛呂山町 | 社会福祉法人 | 埼玉医療福祉会 光の家療育センター |
| 朝霞市 | 社会福祉法人 | 埼玉県社会福祉事業団 あさか向陽園 |
| 嵐山町 | 社会福祉法人 | 埼玉県社会福祉事業団 嵐山郷 |
| 吉見町 | NPO法人 | とりにてい |

| | | |
|------|--------|-----------------|
| 春日部市 | 医療法人社団 | 双里会 多機能型事業所わっくす |
| 杉戸町 | 社会福祉法人 | 杉風会 庄内 |
| 吉川市 | 社会福祉法人 | 彩凜会 ひだまり |
| 三郷市 | 社会福祉法人 | 川の郷福祉会 おれんじ |
| 久喜市 | 社会福祉法人 | 啓和会 |
| 久喜市 | 社会福祉法人 | たいむ共生会 |

東部

| | | |
|-------|--------|-------------------|
| 上尾市 | 社会福祉法人 | 埼玉県社会福祉事業団 あげお |
| 川口市 | 社会福祉法人 | みぬま福祉会 工房集 |
| 川口市 | 社会福祉法人 | めだかすとりいむ |
| 鴻巣市 | NPO法人 | ハーモニー |
| さいたま市 | 社会福祉法人 | さいたま市社会福祉事業団 |
| さいたま市 | NPO法人 | 織の音アート・福祉協会 織の音工房 |
| さいたま市 | 社会福祉法人 | ささの会 多機能型事業所ぼとふ館 |
| さいたま市 | 公益社団法人 | やどかりの里 すてあーず |
| さいたま市 | 社会福祉法人 | 久美愛園 |
| さいたま市 | 株式会社 | 生きいき |
| さいたま市 | 社会福祉法人 | 邑元会 |
| 戸田市 | 社会福祉法人 | 戸田わかさ会 |

南部



“想い”に寄り添う

工房集とアトリエ見学ツアーのご案内

その根底にあるのは、一人ひとりが主体的に生きていること。豊かに生きていること。
楽しく暮らしていること。人間らしく生き生きしていること。そのことを大切にしていること——

「集(しゅう)」という名前には、「新しい社会や歴史的価値観を創るためにいろんな人が集まっていこう」
「そんな外に開かれた場所にしていこう」という想いを込めています。

障害の重い人の表現の可能性を模索し続け、その作品を通じて
多くの人とつながり、関わり、新たな可能性が生まれています。

表現することは、人間が生きていることそのもの。

表現活動を通じて、障害の有無に関係なく、
人と人とを豊かにつないでいきます。

KOBU SYU



表現を仕事に

みぬま福祉会の表現活動は、「どんな障害がある人でも受け入れる」理念のもと、1994年頃、
重い障害のある仲間*の仕事を模索する中から始まりました。当初は少人数での活動でしたが、
外からアートとして共感や評価を得たことで理解も広まり、2002年にアトリエ、ギャラリー、
カフェ、ショップからなる「工房集」を開設しました。現在では、11のアトリエを中心に約150人も
の仲間が、表現を仕事として取り組んでいます。「工房集」は、その表現活動の総称でもありま
す。特別に才能がある人を集めたのではなく、地域に居場所を求めている仲間の人格を尊重
し、一人ひとりの想いと向き合う日々の支援の延長から、多彩な表現が生み出されています。

関わりを学ぶ

工房集では、「障害者芸術文化活動普及支援事業」の一環として、その表現活動の現場を巡る
「アトリエ見学ツアー」を行っています。絵画や織物の制作ができない仲間でも、「これしかでき
ない」ことから作品を生み出す、多彩な表現が共存する現場を見てもらい、表現活動には何が
大切か、ともに「支援のあり方」を考えていきます。担当スタッフは仲間の成長やスタッフの関わり
方、仲間同士の支え合いなどについて話し、仲間たちも自ら作品づくりへの想いを語って
います。また、カフェ運営に携わる家族にも、その役割や想いを語ってもらっています。

アトリエ見学ツアー ※コロナ禍のため中止。今後は「オンライン見学会」も予定しています。
工房集内のアートセンター集までお問い合わせください。電話：048-290-7355 (平日10:00-17:00)



※みぬま福祉会では施設利用者を「ともに働き・暮らし・地域をつくる仲間たち」との想いを込め「仲間」と呼んでいます。

これまでの活動報告やシンポジウムなどの記録、出展作品や今後の展覧会・研修会などの情報は、随時ホームページにアップしています。ぜひ、ご覧ください。

アートセンター集 <https://artcenter-syu.com>



「令和3年度埼玉県障害者芸術文化活動普及支援事業」報告書
art center syu 2021 report スタイル
みんなでつくる 埼玉方式

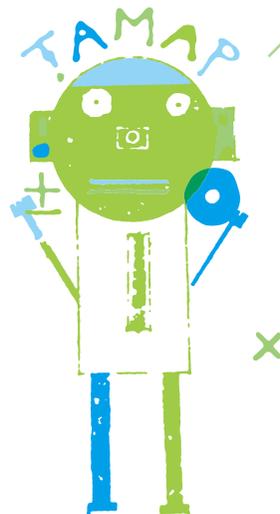
2022年3月28日発行
企画・編集・発行：社会福祉法人 みぬま福祉会
埼玉県障害者芸術文化活動支援センター アートセンター集
〒333-0831 埼玉県川口市木曾呂1445（工房集内）
TEL 048-290-7355 FAX 048-290-7356

構成編集：武居智子、con*tio、工房集
アートディレクション：藤沼重人 (Type-f design room)
写真撮影：武藤奈緒美、今井紀彰、鈴木広一郎、工房集
イラスト (p.4図版内)：岸 潤一
漫画制作 (p.20)：関 翔平 (工房集)
デザイン (題字・ロゴ・タマップくん)：水川史生 (en design studio)
原画制作 (題字・タマップくん・ダンス公演文字)：尾崎翔悟 (工房集)

事業にご協力くださいましたみなさま、誠にありがとうございました。
©社会福祉法人みぬま福祉会・埼玉県
※無断転載厳禁

「埼玉県は特にこれといって特色がないんです」と言ってしまうほど、謙虚で控えめで県内の自慢が下手な県。でも、良いところはたくさんある。そういったイメージを一言であらわすと…±0。埼玉県は「ブラマイゼロだ」という障害のあるメンバーの意見に「埼玉をもっとアップ(向上)させたい」「県内のつながりをマッピングしよう」という想いを合わせて「埼玉県障害者アートネットワーク TAMAP±0 (タマップ)」と命名しました。謙虚で控えめな中に様々なものを良しとする懐の深さ(ごちゃまぜ上等!)を持ち合わせている。「そんな埼玉を盛り上げていこう!」という想いを込めています。

みなさまのご参加をお待ちしています!



困難や例外的な状況にある人を切り捨てない。

つないだ手を離さない姿勢は、

人間の「よりよく生きたい」という

当たり前の願いと共通して、

個や集団を発達させる力になります。

他者の痛みに共感し、怒りや不安、

危機感を同じように感じることが、できるかどうか。

仲間も家族も職員も一人ではありません。

多くの人と手をつなぎ、たくさんの力が合わさって、

きっと社会を変えていく力になるのです。



art center syu

<https://artcenter-syu.com>